『鎌倉実記』の性格

――源平の実録と虚構――

堀竹忠晃

(I) 実録と虚構

『鎌倉実記』は十七巻十七冊の歴史に取材した実録物である。『国書総目録』には「雑史」と分類している。おそらくこの分類は江戸の享和二年(一八〇二)刊、蘿月庵尾崎雅嘉の『郡書一覧』の巻一にある「雑史」の分類をうけものかと思われるが、昭和年間に刊行された『日本古典文学大辞典』の第二巻で、国文学者の中村幸彦氏は、『鎌倉実記』の解説で「軍記」と分類されている。この「軍記」という分類は、たとえば同大辞典の『平家物語』の解説に「軍記」とあることから、内容上同一のものと見なされようが、『平家物語』は歴然とした軍記物語であるのに対して、『鎌倉実記』は『平家物語』と同様に軍記物語と断じ得ない要素を含んでいる。物語と断ずるには、評論あり、歴史記録があったりと、いわば雑然とさまざまな要素が入り汲んでいて、「軍記」と呼称できない性格のものである。だから「雑史」と分類したほうが『鎌倉実記』の性格を語り得ていると思われる。

さて、ここで「実記」の著者に登場願おう。

「実記」の「序」と題して、作品の由来を語っている。今それに注目したい。

古の物語は今のかゝみなり。其事に偽りたかひありては鑑(カゝミ)となりかたし。昔より治乱蹟(アト)をましへ、栄枯地をかふるならひ、今更めつらしからすといへとも、就中(ナカンツク)源平の盛衰ほと、めさましく、おとろくへく、つゝしむへきはなし。然るに其ことを記せし書、いつはり差(タカ)ひありて、かゝみとするにたらす。故に其徴(シルシ)とすへき諸家の秘録により、其事のおほひにして、治乱盛衰の要となるへきもれをあつめ、頼朝にはしめ義経に終り、鎌倉実記と名つけ侍り。彼を是とし、此を非とし、あるひは善、あるいは悪とし、其邪正をわかつことは、見る人の心にあるべし。[1]

右に記した内容を要約すると、源平の盛衰ほど変化が甚しく慎しむべきものはない。しかるにそのことを記した書は、いずれも偽りや誤りがあって、真実に程遠く鑑とするに足らない。そこで諸家の秘録から源平の治乱興亡の要となるべき、一般には未公開の資料を収集し、頼朝に始まり義経に終わる実録を記し、その善悪を問いたいという。

ここにいう『鎌倉実記』の著者は、洛下隠士であり、『近代著述目録後編』によれば、医家の加藤謙斎という。著者の謙斎については後述するとして、ここで著者がいっている過去の源平盛衰の記録には偽りや誤りがあって、諸書いずれも真実を伝えていない。だから自分は諸家に秘蔵されている、信頼するに足る歴史的史料を入手して、真実の歴史的記録を心がけたという。著者の態度は明快である。真実の源平記録を著作すること、これこそが加藤謙斎の著述であった。

ところで、「実記」の第一巻には十七冊にわたる各巻の目次に続いて、

「実記」の引用書籍が二十五書、記されている。『帝王編年記』『公御補任』『百錬抄』等、諸家の秘録とはいえない公的な史料にまじって、『台記』『山槐記』『吉記』等の諸家の記録があるが、これらは江戸時代においては秘録とは既に見なされていなかったのではないか。[2] これらの二十五書の外に、作品中にしばしば著者が引用する書物がある。「或記」という語で記されているものだが、和製漢文によってそれは表記されている。これは明らかに『玉葉』であることが認められる。『玉葉』といえば、源平の動乱期を摂関家の一員として生き抜いた藤原兼実の日記である。『玉葉』を参考文献として引用していることは著者の歴史追及する態度の見識の高さを有するものとして評価してもよい。

しかしここで極めて問題視しなければならぬことがある。二十五書の中で著者が引用する『准后親房記』『伊豆日記』『琵琶法師物語』『金沢本平家物語』等である。これらの書物は、現在まったく所在のつかめないもので未詳という外はないものであるが、その未詳の書物が「実記」では堂々と史料的価値をもって引用されているのである。実はここに『鎌倉実記』の秘密が隠されていると思う。

(II) 虚構のからくり

(1) 『伊豆日記』

まず最初に『伊豆日記』について検討したい。「実記」には『伊豆日記』については、巻一「右兵衛佐頼朝伊豆国配流事」の章段に『伊豆日記』を引用した箇所があり、その『伊豆日記』については割注で次のように記されている。

前ノ武衛ノ命ニ因リテ藤原広有草書ス。広有ハ伏見ノ冠者広綱カ弟ナリ。(原漢文)

さて、この『伊豆日記』の著述者が伏見冠者の弟ということで出自が語られているが、この広有の存在が不明である。確かに『吾妻鏡』には伏見冠者広綱は存在する。しかも彼は右筆として養和二年(一一八二)五月十二日に、京都になじみある者として、頼朝の許に迎えられている。兄の広綱が右筆として頼朝に迎えられたとすれば、広綱の弟の広有も兄と同様に右筆の資格を有すると見なされても不思議ではないが、広綱に関してはさきにも述べたように所在不明であり、また、『吾妻鏡』にはいっさい登場しない。『尊卑分脈』にもそれらしき人物は見当らない。広綱に関しては、寿永元年(一一八二)十二月十六日以後『吾妻鏡』から姿を消している。実をいうと、彼は頼朝の浮気に助力したことで、頼朝の妻女・政子の勘気を蒙り、遠江の国に配流されている。それ以後彼の消息は杳として不明である。広有が「実記」のいうように頼朝の右筆として、頼朝から命じられていれば、当然『吾妻鏡』に兄の広綱以上にその所在を示す記事がなければならない。ところが、『吾妻鏡』には広有の記事がいっさい見当らない。これは「実記」の巧妙なうそではないか。伏見冠者藤原広綱は頼朝の右筆として存在した。それは『吾妻鏡』に歴然として存在する。その存在を背景として、ありもしない広有を登場させることで、源平時代の歴史の空白を埋めようとしたのではあるまいか。したがって、広有の記すところの記事は作者加藤謙斎がつくり出した虚構と見なしてもよいかと思う。たびたび引用される『伊豆日記』の内容は部分的に史実に近いところもあるが、[3] たいていは虚構であろう。

また、「実記」にはこんな話がある。

頼朝は木曽義仲の自立心を倒さんとして、京への先陣の大将を弟の範頼、後陣の大将を佐々木四郎高綱に評議一決させた。高綱は宇治川先陣に備えて、着々と準備を進めていた。一方、梶原平三景時はこのことを

恨みに思い、自分こそ宇治川先陣を渡すべき者として、後陣の大将に選んでほしいと頼朝に訴え出る。ある夜、頼朝はひそかに景時を召し、『伊豆日記』を開き、仁安二年（一一六七）八月一日の条を探し出し落涙した。その記事には次のような内容が記されてあった。

今日佐々木四郎左衛門、京ヨリ来ル。羇旅日数僅ニ四日。郎等田中源五一人。螺鈿ノ筐（カイハコ）長一尺五寸広七寸ノ中ニ、八幡太郎義家自譜ノ巻物三巻并ニ鎮守府印鑰（インヤク）（聖武皇帝勅封ノ庫蔵三所、多賀城ノ南政所ノ御坪ニ在リ。按察使下向ノ時、之ヲ賜フ印鑰ナリ）是我多年ノ大望ナリ。去七月二十三日八幡大菩薩ノ御告ニ因リ、四郎左衛門高綱持来ル重宝ナリ。秀義老後の至心盡ス可ラズ云々。（巻八「鎌倉より木曽追討催の事」、原漢文）

景時も今は言葉もなく頼朝に礼をして退出したという。頼朝自身が『伊豆日記』を所持していたのである。

ところで、『吾妻鏡』を検索してみると、佐々木四郎高綱は、治承四年（一一八〇）八月十七日を初出として、建仁三年（一二〇三）十月二十六日、子の重綱が伯父盛綱とともに官軍として出陣する時、高野山より下山して、子の重綱の行装を見てその死を予見することがあった。この入道高綱の兵法に達した記事を最後として高綱は『吾妻鏡』から姿を消すのである。彼の登場は『吾妻鏡』を通して十八回を数えるが、その間にさきの『鎌倉実記』に記した内容には一度も出会わない。『伊豆日記』が『吾妻鏡』にない秘録を収めているならば、八幡太郎義家自譜の巻物や鎮守府印鑰を高綱が持参するのは頼朝にとって重大な出来事に相違ない。当然それは『吾妻鏡』に記述されてしかるべきであろう。しかし、その事実はない。やはりこれは『伊豆日記』ひいては「実記」の著者の虚構と考えるのが自然であろう。

『伊豆日記』は『国書総目録』で検索してみると、その名称を有するものはすべて地誌の類であり、歴史記録の類ではない。佐村八郎著『国書解題』（下巻）に『伊豆日記』が写本一冊として解説されており、頼朝の助命から旗挙げに至るまでの経歴を記したとある。佐村氏はその『伊豆日記』を「事実の信ずるに足るもの少し」とされている。実際そのような『伊豆日記』が現存したのであろうが、おそらく後世の偽作であろう。謙斎の『伊豆日記』とどのような関係にあるかわからないが、さきの高綱の話は歴史の真実を語っているとは思えない。

（2）『琵琶法師平家物語』

『鎌倉実記』にはしばしば『琵琶法師平家物語（語句）』が引用される。この『平家物語』には割注があり、次のように記されている。

此即平家物語の元本なり。つれつれ草にいふ信濃前司と慈鎮和尚の著すところの書なり。引句三十六韻語句三十六句あり。引句はふしを付琵琶に合てうたふ音曲なり。語句は琵琶を下にさしをきふしもなく、書籍の素読（スヨミ）なんとするやふに其事実を諳（ソラ）にて語るを語句といふ。（巻一「小松内大臣重盛熊野詣并薨去の事」）

さて、まずこの割注に述べた内容から検討したい。ここでいう「元本」とは原平家の謂であろう。『徒然草』第二百二十六段にいう「後鳥羽院御時」で始まる、有名な『平家物語』成立に関する章段である。「実記」の著者は『平家物語』の成立が「信濃前司」（行長）と「慈鎮和尚」の合作であると語っているが『徒然草』では信濃前司行長が『平家物語』を作って生仏に語らせたという。さらに武士のこと弓馬の業は生仏が東国の者なので、武士に質問したりして書かせたという。いささかオーバーにいえば、行長と生仏の合作が『平家物語』であり、慈鎮和尚は楽府の御論義で失脚した行長を扶持したパトロンであった。「実記」はわざ

わざ『徒然草』までを引用して、『平家物語』の成立を語ったのであるが、『徒然草』に語られた『平家物語』の成立の由来が記述内容から逸脱した誤りを犯したのである。

しかし、考えてみれば謙斎にとって、そのようなことは大して問題にならないことかも知れない。『徒然草』に書かれている行長の、『平家物語』成立に関する話、これはまさしく歴史的文献である。行長や生仏合作の原本が存在するかしないか、また、兼好の語ったことがどれほど『平家物語』成立の事情を歴史的確かさで語り得ているか、どうかということ、そんなことは謙斎にとっては問題ではない。兼好が語ったということが重要なのだ。兼好が語ったという事実に依拠して、想像力を駆使して虚構をつくり出していく。これが謙斎の用いる手なのである。だから虚構の性格もまったく歴史を無視した虚構でなく、歴史または歴史的事実に基づいた物語的、説話的発想なのである。

(3) 准后親房記

『准后親房記』は、「実記」で重要な役割を果たしている。南朝の重臣・北畠親房の著書という。親房には『神皇正統記』という歴史的に著名な書がある。そのような親房であれば源平時代を扱った『准后親房記』も親房の著書と一般の読者は思うかも知れない。特に子供や婦女子であればなおさらのことかも知れない。謙斎は「実記」が子供をも対象にしたものであると語っている。

童蒙の見るに便りあらん為に文章のいやしきをいとはず。此を見ん人文章の野鄙なるを以て、事実を疑ふことなかれ。[4]（巻十五「頼朝任二天下惣追捕使一事」）

さて、旧刊の「日本古典文学大系」の『風土記』に「逸文」として、伊豆国の記事が三箇条にわたって記載されている。「伊豆猟鞍」「温泉」「造船」である。[5] この三つの記事は「古典大系」の注釈者・秋本吉郎氏によって「参考」として供されている。実はこの伊豆国の逸文の三箇条の記事は「大系」の解説によると、江戸期の今井似閑が採択したものという。その採択の原典が『鎌倉実記』中の『准后親房記』なのである。『風土記』の注釈者である秋本氏は、三箇条の『鎌倉実記』中の記事について、「鎌倉実記の資料的価値が疑わしい。恐らくは後代の記事」、「准后親房記の資料的価値が不明。記事・文章によれば古代の風土記とは認め難い」等と、『鎌倉実記』および『准后親房記』の資料的価値を疑っておられる。『准后親房記』について秋本氏は「親房の著者と伝えられる書には見えない」と、『准后親房記』の存在自体を疑問視されている。やはりここにも「実記」の謙斎の手法が見える。一見事実であるかの風を装いながら、そこに虚構を織り交ぜて歴史を巧妙につくり変えていく態度がうかがえるではないか。

ところで、ここで『准后親房記』の話をひとつ紹介したい。巻八の「鎌倉より木曽追討催の事」にある清水冠者義高にまつわる話である。義仲の子息・義高は鎌倉から海野兼保入道を使いとして派遣し、父義仲の行状を戒め、頼朝に降参し、「右兵衛佐殿ニ御侘言アラハ御安全トイヒ、北国ノ戦功イカデカスタルヘキ、再ヒ木曽エ御帰アリテ、年来ヨシミノ人々ニ悦ハセ玉へ……」という。しかし、義仲は義高の諫言をうけ入れない。「是ハ唯義仲カ死狂ヒト思ヒ玉へ……只一日成トモ家ノ面目ニハ、将軍トイハレテ死ナン。命ハ努々惜カラシ」と義高や兼保の意見を拒否する。そのような義仲の心を道理のわかった人は「今高運ナル鎌倉ヲ背カハ、ナンソ利アルコトヲ得ント智アル人ハ頼ム心モナシ」と『准后親房記』は伝えている。

『准后親房記』は、義高が義仲の許に兼保入道を使いとして派遣した

期日を寿永二年（一一八三）十一月十五日と記している。十一月という月は義仲が後白河院の法住寺殿を攻撃し、院の近臣を解官したりして都で横暴を極めていた時期である。義高の以上の話は『平家物語』諸本にはまったく見えないものである。義高が頼朝の許へ人質（表面上では聟として）として鎌倉へ送られたのは史実である。義高は頼朝のもとで、父義仲の都での専横の様をひそかに聞いて、子ながらも胸を痛めていたであろうと思われる。そして事情が許されるならば、使いの者を遣ることで父を諌めたいと願っていたかも知れない。それがこのような兼保派遣の話となったのであろうか。『鎌倉実記』の義高物語は頼朝に入聟した義高の歴史上の史実を基にして物語的発展を遂げたものである。この義高物語がいかなる素材に基づいて成立したのかは不明である。出典は未詳という外はないが、あるいは「実記」の著者の創作（虚構）かも知れない。それともひとつの異伝を示すものであろうか。

（4）『金沢本平家物語』

『鎌倉実記』に『金沢本平家物語』について記述があるのでまずそれを引用してみる。

或曰石橋山ノ合戦。東鑑盛衰記等ニ記録スルトコロト此記ト大ニ異ナリ。就レ中（ナカニツク）頼朝大庭カ兵ニ追ツメラレテ土肥ノ杉山ニ籠リ、臥木（フシ）ノ中ニカクレシヲ梶原平三既ニ此ヲ見付タリトイヘトモ、ワザト遁シマヒラセ大庭ヲアザムキ他所ヲ覓（モト）メ探シテ、頼朝無レ恙（ツハカ）筥根ノ坊ヘイリタマフ。或ハ直ニ土肥ノ真鶴崎ヘ落サセタマフトモ記ス。然ニ今此ニ記スル所ヲ見ルニ、頼朝合戦ヨリ一日前ニ安房ノ国ヘヒラカセタマフヨシ臥木ノ中ニ隠レラレシ一段ハ古今ノ常談ニテ、此記ニ依ルトキハ全ク偽リナリ。イカヽ不審不レ少。対日、石橋山ノ合戦ハ源氏最初ノ軍ニシテ、古今ノ記録事実不レ詳ト准后ノ説ニモミヘタリ。琵琶法師所レ載甚略シテ不レ委。東鑑ニ所レ記モ可レ疑モノ多シ。只金沢本ニ所レ録其事体尤然ルヘシ。故ニ此書ニ所レ記ノ石橋山合戦ハ専ラ金沢本ニ依テ録セリ。（巻四「頼朝石橋山旗上の事」）・（石橋山本名厳階山事代主神鎮座）

『吾妻鏡』『平家物語』諸本すべて頼朝の石橋山の合戦、杉山への逃避行を記しているのに、「金沢本」はそのことはなく、八月二十二日の夜には早くも頼朝は安房へ船で渡海している。『吾妻鏡』によれば、頼朝の安房渡海は八月二十八日である。また、『平家物語』の語る頼朝の臥木の話は「金沢本」によると事実なかったということはさきにある通り。

「実記」の著者が「金沢本」を採用した理由は何であろうか。おそらくそれは歴史的事実に注目したというよりも、著者の兵法的観点からの採用ではなかったかと思われる。

元来頼朝石橋山ニテ敵ヲ引請ケ、合戦アルベキ意得（ココロエ）ニハアラス。石橋山ニ旗ヲ上テ諸国ノ味方ヲ聚（アツ）メ、安房小総ノ方ヘ打越、本陣ヲ立ベキ計略ナリ。然ルニ二十日ノ暁天ニ旗ヲ上ラレ、二十一日二日ニ至ルマテ約諾ノ味方一騎モ不レ来。三浦党サヘ遅カリケレハ、殆案ニ相違セリ。若味方不レ聚サキニ敵大軍ニテ取圍（トリカコ）マバ、合戦ノ勝負計リガタシ。其危ヲ避ケテ安キニ就クハ軍慮ノ賢キトコロナリ。（中略）此レ兵法ノ至善ナリ。（巻四「頼朝石橋山旗上の事」）

実際「金沢本」が存在したかどうかは疑問であるが、山田孝雄氏は氏の著書『平家物語考』のなかで「金沢本」に言及し、「典籍秦鏡に平家物語をあぐること十五そのうち、語り本、一方本、八坂本、中院本等はいふを要せず。たゞ一種、金沢本といふものあり。蓋金沢文庫の旧蔵本の義か」とし、「この本また未だ価値の知れざるものなり」として、ま

だ「実見せでは何事もいふべからず」とされている。その後高橋貞一氏以下現在に至っても「金沢本」については言及されていないのではなかろうか。『国書総目録』を弊見しても「金沢本」は記載がない。幻の「金沢本」ということになろうか。「実記」の著者はこの本を見たのであろうか。もしそうだとすれば現存の『平家物語』諸本とはかなり異なった特殊な内容の異本を「実記」の著者は見たことになる。

(Ⅲ) 『鎌倉実記』の立場

(1) 歴史評論―頼朝の関東流罪は重盛の計らい

頼朝の伊豆流罪は重盛の深慮遠謀によるというのが著者の意見である。まず『准后親房卿琵琶法師伝』から頼朝の生け捕りのことが述べられる。頼盛の郎等・弥兵衛宗清が三河の目代として下ったが、遊君の物語りに頼朝のことを聞き出し、頼朝を生捕りにして都へのぼり手厚くかくまう。宗清は直ちに池殿へ参り、池殿の寝所にて頼朝の身柄拘束のことを話し、池殿はそのことを聞くや急ぎ重盛の所へ出かけて行く。池殿の息・頼盛も行動を共にして、結局頼朝はこれらの人々の尽力によって、伊豆の蛭児嶋へ流罪ということになった。

『准后親房卿琵琶法師伝』によるさきの頼朝の生捕りのあらましは、『金刀比羅本・平治物語』や『古活字本・平治物語』などと大筋において近似しているが、ただ異なるのはこれは重大な異同であるが、流罪を決定する清盛当人の姿が見えないことである。さきの『平治物語』では、池の禅尼の重盛への訴え→重盛の清盛への説得→清盛の流罪決定というコースをたどるが、この最後の清盛の決断の場面は「琵琶法師伝」からは欠落している。しかし、直接清盛当人はここには登場しないが、「その命を乞うけ伊豆の蛭児嶋にながされけるとぞ聞へける」(巻一「右兵衛佐頼朝伊豆国之配流事」)とある以上、頼朝の命乞いを願ったのは、池の禅尼、重盛たちということになろう。つまりこの「琵琶法師伝」は、清盛を登場させないことで頼朝の身柄と死罪免除が重盛、池の禅尼によって秘密裏に進行したことを物語っており、頼朝の命を救うことが重盛たちにとっていかに大事なことであり、余人を交えずに暗々裏に事を運ばなくてはならないかを示しているのである。

今、著者謙斎の意見が「琵琶法師伝」の後に記されているのでそれを記す。

事体如レ此ナレハ若頼朝ヲ殺スカ、或西国ナトヘ流シヤルニ於テハ忽チ大乱ノ起ル端ナリ。其所以ハ其時関東ノ武士八平氏四籐私党ヲ始メ源氏ヲ敬ヒ親ムコト、累代重恩ノ君ヨリマサレリ。(中略)頼朝ヲモ誅スルカ或ハ西国ヘナンド流シ遣リ。八幡殿ノ子孫亡果ヘキ躰トミルニ於テハ、タトヘ朝敵ニセヨ、目カクルトコロハ清盛カ一類ナレハ、不日ニ関東ヨリ大乱ノ起ルヘキコト必定ナリ。重盛ノ賢慮此ヲ先知シテ東国ヘ流シヤラレシナリ。(中略)又伊豆国ハ頼政父子ガ受領ノ国ナレハ、一門ノ国ヘ流シタル躰ニモテナシ、実ハ祐親ニ預ケラレタルナリ。此重盛ノ事ヲ処スル委曲詳密ナリトイフベシ。(中略)関東武士ノ憤リヲナダメ、頼朝ヘモ懇情不レ浅シテ偏ニ恵徳ヲ以テ自他ノ穏便ヲ処セラルルコト重盛ニ非スンハ及カタキトコロナリ。(以下略、巻一「右兵衛佐頼朝伊豆国ヘ配流事」)

著者の意見は明白である。関東武士の憤りをなだめ、関東武士が平氏の方へ心が移り、重盛の恵徳を慕う気持ちを起こさせんがための重盛の深慮遠謀であったのである。「琵琶法師伝」の重盛のひそかな行動は、この著者謙斎の意見を参照すればより明確となる。重盛は頼朝の流罪に

ついて、さきのような配慮を秘めていたのである。

ところで、頼朝の流罪が東国に決定したことについて、現代の歴史家はどのように判断しているだろうか。たとえば永原慶二氏は『源頼朝』（岩波新書）のなかで、次のように述べておられる。

頼朝の配流国が伊豆と定められたのは、おそらく、律令制以来この国が流刑の地となっていたからであろう。同腹の弟希義は、やはり捕えられて土佐に流されたが、この国も当時の貴族社会においては遠流の国なのであった。伊豆のうちで、とくに蛭ガ小島が配流の地にえらばれたことも、それだけの理由があったと思われる。この盆地は（中略）しかも、この盆地のなかでも有数の土豪北条氏は、平氏の一流として勢威をふるっていた。また半島の東海岸から中央部にかけて、工藤・宇佐美・伊藤・狩野など、平氏にくみする武士団が、これまた清盛に忠誠を誓っていたのである。しかも関東は源氏の本拠とはいえ、すべての武士団が源氏に心をよせていたわけではない。関東のめぼしい雄族は多く高望王に発する平氏の一流であって、源氏の恩顧をうけたこともあったが、いま全盛をほこる清盛に、正面きって楯つくものではなかった。だから、清盛が配所をこの土地に決定したことは、当時の判断としては、かならずしも適切でなかったとはいいきれない。（Ⅲ配流の時代　1蛭ガ小島）

現代の歴史学は頼朝の関東配流を以上のように評価している。ところが、永原氏は清盛の「見とおしに重大なあやまちがあったことも否定できない」という。そのことについては次のように述べておられる。

中央権門に接近し、貴顕の地位にのぼることに目標をおいていた清盛には、東国武士国の潜勢力が、組織された武力に転化した場合のおそろしさを、じゅうぶんに予見することができなかったのである。（Ⅲ配流の時代　1蛭ガ小島）

その点で頼朝を関東に流罪させようと企てた重盛も、清盛同様に予見できなかったのではあるまいか。結果としては頼朝が関東に流されたことで、東国武士団の組織化と結束力とが飛躍的に高まったといえる。頼朝は彼ら東国武士団の棟領として、彼ら武士団が仰ぎみるほどの高い地位を有した存在と見なす上では、まことにふさわしい人物であったのである。結果的に重盛の画策が裏目に出たというべきではあるまいか。

しかし、謙斎の意見は江戸期における頼朝流罪に関するまことに興味深い、ひとつの歴史的意見といえよう。

（2）歴史人物論

（ア）重盛―知盛―教経の系譜

『平家物語』では、重盛の存在は一門では図抜けた高い人格的存在として位置づけられている。彼の死後平氏が破滅的傾向を高めていくことからも、人間的にも政治的にも一門の中で格段の高い位置を占めていたことがわかる。これは『平家物語』の世界のできごとだけの話ではなく、歴史上の事実としても真実であった。『平家物語』の重盛は一門の中では高い人格ゆえか、孤立的傾向を持ち、彼の教えを忠実に守っていこうとする継承者には恵まれていず、彼の嫡男の維盛ですらも、父から程遠いひ弱な存在でしかない。平家の嫡流としての自覚はなく、伯父の宗盛一門の圧力に耐えかねてか、平氏一門から離脱するほどの線の細さであった。ところが「実記」では重盛は自分の後継者を知盛、教経と見込んで、船戦の兵法をも修得させ、一院や清盛の厳嶋詣、鎮西渡海のために備えるのだ。それ以外に後日に備えての配慮もあったかも知れない。「琵琶法師伝」に次のようなことが記されている。

小松殿在世の此ハ、斐流（ヒ）の舟軍（フナイクサ）修練の為にとて知盛教経の卿と、

年かはりに一たび、鞆の湊に下向あり。其秘術を得させ給ふ。其時は備前に唐琴泊、櫃石、塩浦、此間に軍船百艘を置れ、瀬戸には、水嶋、鼻くり、難所にて船の掛引自由の櫓梶を覚へたる。船頭水主を撰んで軍船を備ふ。室、鞆、吹上、只海、尾道、廿日市、三田尻、上関、下関の湊には御座船二艘、役舟貳十艘つゝ国司の用意として、一院あるひは清盛なとの厳嶋詣て、鎮西渡海の為なんとに、かねてしたゝめもふけたる事、皆小松殿御計略なり。故に西海の船路百余里の間、海を以て陸とするの術ありとて、重盛知盛教経をは、時の人磯等の三将と申けり。（巻九「平家一谷に籠る事」）

ここにいう「斐流」とは具体的にどこの水軍をいうのであるか。斐流とあるからには甲斐の武田氏のことをいうのであろうか。備前や瀬戸に船を構えたと本文にあるから当然瀬戸内の水軍のことになる。甲斐の武田の支流である武田氏のことをいうならば、安芸武田の祖は信武の子氏信が南北朝時代に安芸守護となって以来とされるから時代的には合わない。今のところ「斐流」とはどこの水軍の流派であるか未詳というほかはない。

ここでは重盛、知盛、教経の系譜を見ておきたい。水軍の兵法修練に関して、彼ら三人が「磯等の三将」といわれるほどに知られていたことを伝える話である。

さて、これら三人の系譜をさらに見ておきたい。

「実記」巻十「範頼義経一谷城発向事」の章段で、清盛の一周忌を迎えて、宗盛と資盛とが阿閑梨を迎えて法事を営むことを語ったところ、知盛、教経が涙をはらはらと流し、すみやかに事を投げうって「一向戦場」の工夫こそしかるべきだという。彼らの言はこうである。

此八九年関東の勇士、蟄懐一時に開き、雲へものほらんと思ふ者ともか、豈入道殿の御仏事を遠慮あらんや。すみやかに万事を抛て、一向戦場の御工夫こそ専らならめ。北国東国数ケ度の軍、たゝ其ゆるかせにして、不覚をとりし事なり。知盛教経か命のあらんうちに、源氏に向ふて弓射るすべの御評定あって、昔の勢にこそかへらすとも、恥辱におよはぬ御はからひあるへき事なり。

知盛と教経が一門の総師・宗盛に対して諫言する場面である。宗盛へ諫言する知盛、教経の発言は実は先例がある。『平家物語評判秘伝抄』で、清盛が重病で倒れたために、宗盛が総大将となって東国征伐する軍勢の進発が一時停止せざるを得なかった。その時教経が宗盛に諫言し、「鎮べき時に敵を制せずんば、敵の軍兵日々に重なり……只理をまげて御出陣候へかし」と諄諄と熱弁をふるう。しかし、宗盛は聞き入れなかった。教経は「重盛存生の間に、仰をかれ候事ども承置候に、今もって一ッも違はす」という。教経のこの発言は彼の重盛に対する信頼の厚さ、尊崇の念の強さを物語っている。「実記」では知盛、教経が、万事を投げうって戦場へ向かうことを、『平家物語評判秘伝抄』では、教経が理をまげて出陣することを宗盛に説得している。しかも「平家評判」では重盛のことが教経によって語られている。

以上のことを考えてみるに、重盛、知盛、教経の系譜関係が、「平家評判」「実記」ともに共通していることがわかる。やはり両者の作品の間に影響関係があったと見てもよいのではなかろうか。「平家評判」の刊行が慶安三年（一六五〇）であり、「実記」の刊行は享保二年（一七一七）であるから両作品間には六十有余年の時代的な開きがある。当然「平家評判」から「実記」への影響が至当であろう。率直にいうならば、「実記」の謙斎は「平家評判」を読んでいるに違いないのである。

また、知盛、教経は重盛との関わり以外でも称揚されている。『准后親房記』にはそれが見受けられる。

准后記曰。平家ノ大将ノ中ニテ能登守ト知盛、此両将ノ軍勇軍慮ニ

テコソ、数度ノ難義ヲ立直シ今一ノ谷城ヲ構ヘ、源氏ニ向テ楯ヲツクホトニナリタルナリ。（巻十「一谷落城の事」）

また、壇浦の戦いで義経側についた阿波民部重能が重盛の情けによって今まで平家に仕えてきた、平家の軍勢は今は皆逃げの用意をしない者はない。知盛一人陣にいるからこそその義理を感じて陣に留まっている兵もいると語るのである。

（イ）　頼朝、義経、大江広元など

「実記」の著者は頼朝に関しては、重盛ほどに高い評価を与えてはいない。むしろ頼朝の猜疑心の強い性格をあげているほどである。

義経については、軍事的才能は古今独歩と評価するが、己れを誇示し、他を蔑ろにする癖があるとかいって批判している。義経の腰越状についても、これは兄頼朝に向かって罪を謝する言葉ではない。頼朝はかえって怒りがますであろうといっている。さらに義経が頼朝に殺されたのは、頼朝の立場からすれば止むを得ないことだと頼朝の立場を認める発言をしている。

大江広元は奸臣と断じている。

私曰広元ハ阿曲（アキョク）ノ奸臣ナリ。其身学才モ有リシ人ナレハ、頼朝モトヨリ信用ス。頼朝ヲスヽメテ不仁僭逆ノ人ト為セシ随一ノ人ナリ。（巻十六「源義経吉野南都処々隠事」）

（3）　兵法論

「実記」は歴史書、また軍記物語的性質を有しているが、兵法書とはもちろんいえない。たとえば『太平記評判秘伝理尽鈔』『平家物語評判秘伝抄』のような兵法書的な性格の書ではない。しかし、兵法そのものに言及していなくても、兵法に関心を示している。それを二、三紹介しておく。

（ア）　源氏側の策略

○屋島合戦

屋島合戦を前にした義経のもとへ、大蔵卿泰経が院の使いとして義経の発向を制止せんとして渡辺に出かけた事実がある。「実記」はこのことを『玉葉』を引用して記している。

或記曰二月十六日庚午大蔵卿泰経卿、御使ト為リテ、渡辺ニ向フ。是義経ガ発向ヲ制止セン為ナリ。是京中武士無キニ依リ、御用心ノ為ナリ。然ルニ敢ヘテ承引セズ云々（原漢文、元暦二年（一一八五））

この『玉葉』の記事に関して、謙斎は次のようにいう。

私曰此事恐クハ義経カ謀略ナルカ。（中略）今俄事ノ出来タルヤウニ公卿ヲ遣サレ、既ニ半途マテ進ミタル大将ヲ召帰サルヘキコト意得（ココロエ）難シ。此時節平家ニ志有ル公卿、亦隠レ忍フ平氏ノ党類都ニ多シ。義経カ進退日々ニ八嶋ヘ告知セケレハ、義経モトヨリ此ヲサトリ、義経四国ヘ発向延引スヘキノ由、刺使ヲ下サルヽニ於テハ、此事モ亦告知スヘシ。平家ニ油断サスヘキ為ニ、如レ此ノ御使ヲ渡辺マテ下サルヘキト、義経カ方ヨリ密ニ請得タルモノナルヘシ。（巻十三「源義経四国（シこく）発向の事」）

大蔵卿泰経がわざわざ渡辺までやって来て、義経の西海発向の制止を加えたのは屋島にいる平氏を油断させるための義経の謀略という。『吾妻鏡』では、十六日に泰経が舟軍の行粧を見るべきと称して義経のところに前日やってきたとしている。泰経は大将軍という者は必ずしも一陣

を競わなくても、次将を先ず派遣してもよいのではないかと進言した。泰経のこの進言は義経の出発を遠まわしに制止しようという配慮があったのかも知れない。しかし、義経は「殊に存念あり。一陣において命を棄てんと欲す」といって進発している。

義経の平氏の動向に対する警戒心は当時確かに強かったと思われ、「実記」の著者のいうように平氏に志ある公卿や京都に隠れ潜んでいる平氏の党類に対する心配は義経にあったであろう。しかし、泰経の義経訪問を義経の謀略と考えるのはいささか無理があるのではあるまいか。ここはやはり『玉葉』のいうように京中の用心のための泰経訪問と見なした方が真実ではなかったと思う。

○坂落とし

義経が坂落としを敢行したのはあらかじめ斥候、案内者を派遣して、地形、場所等を詳しく調査したからだという。

私曰…義経ホドノ名将、カヽル楚忽有ルヘカラス。兼日ヨリ案内者ヲ入レテ、落サルヘキ地形ヲ能々弁（ワキマ）ヘタマフニヨッテ、五日ノ朝ヨリ三千余騎ヲ引分ケ、三草山ヨリ此峯ヘ廻ラレタルモノナルヘシ。（巻十「一谷落城の事」）

この義経の坂落としについては「太平記評判」でも同様のことが述べられている。

ある時新田義貞と楠正成が戦いについて語り合った。正成は自分は昔の書典は見ることはない。実をいうと自分は義経に習っているのですという。源平合戦の一の谷の坂落としに話が及ぶと、正成は「彼ノ山ヲ落セシコト実ニ由々敷謀ト覚ヘ侍ル。定テ都ニ有リシ時ヨリ案内ヲ能ク見スマシテソ有リケン。又名将ニテ侍レハ、大方ノ国ノ図ヲ弁ヘテ角ハ覚リケン（以下略）、（巻七「吉野城軍事」）[8]

「実記」の著者は「太平記評判」について述べている[9]から、義経の坂落としについての記述も「太平記評判」の影響かも知れない。

『孫子』にいう「地を知り天を知らば、勝は乃ち全うす可し」（第十章　地形篇　浅野裕一　講談社学術文庫）に相応するのであろう。

（イ）　平氏側の策略

「実記」の著者は「或記」即ち『玉葉』の著者・兼実が、一の谷の戦いの後「被レ渡之首中、於二教経一者一定現存云々」といったことについて、兼実は教経が「イマタ八嶋ニ現存アリ」と思っているという。「一定現存」を渡された首はまさしく教経その人の首であったと解釈するのか、あるいはさきのようにまだ生きていると解釈するのか、意見は分かれるが、いずれにしても「実記」の著者は、『帝王編年記』『吾妻鏡』を引用して、教経の死が確かであるといい、さらに次のようにいう。

私曰……此レハ平家ノ謀略ナリ。若教経討死ト披露アルニ於テハ、平家ノ軍ハ柱ノ抜タル如ク、敵ノ勢味方ノ怯（ヨワク）レ、四国九州ノ勢モ、イヨ〳〵思ヒ放スヘケレハ、教経ノ死ヲ隠シテ、教経ノ郎等、讃岐六郎ヲ教経ト披露シタルモノナリ。（巻十「平家諸大将討死の事」）

教経の死に関しては「実記」の著者の説のように江戸時代では教経代役説がかなりまかり通っていたようである。[10]

（Ⅳ）　「実記」の物語性

私は「実記」は実録に名を借りて、巧妙に手の込んだ仕組みを有する歴史物語的性格を有するものと思う。今は所存の不明な『伊豆日記』以

下の記録類を多用することで、いかにもそれが事実あったかのように読者に思わせるテクニックは並みの者ではない。そこには著者の源平時代の歴史理解がなかなかのもので、けっして侮どれない認識があると思う。そうでなければ正史や『平家物語』などにはない裏話的な物語を構想できるわけはない。その点で「実記」は「太平記評判」「平家評判」などの系列に属する面を備えていると思われる。裏話を巧妙にしかけてくる著者の力量はなみなみでなく、そこにまた虚構のおもしろさもあるのであろう。

(V) 書誌的考察

まず『鎌倉実記』の著者について述べておきたい。岩波の『国書人名辞典』に著者・加藤謙斎のことが記されているので、ここでは簡単に述べるにとどめる。職業は医者・寛文九年(一六六九)十二月十二日生まれ、享保九年(一七二四)一月七日、五十六歳で死去。本姓は藤原、名は忠実、字は衛愚、号は謙斎、洛下隠士等。医学、儒学、詩文を学び、若年の頃に俳諧を嗜んだとある。京都に出て医を業とし、門人多数という。

さて、本論文の底本は大阪府立中之島図書館蔵のものである。本論文を作成するに当って、一応全国の図書館・文庫に所蔵されている「実記」を閲覧した。『図書総目録』に記されている「実記」以外にも、たとえば『古典籍総合目録』には、『鎌倉実録』の項に山口大学、和歌山大学、弘前市立図書館等の所蔵が確認される。まだまだ全国の大学図書館、公私立の図書館、文庫等に所蔵されているであろうと思われる。

私が調査したかぎりでは、「実記」はおそらく二系統に分かれると思われる。その二系統というのは刊行の板元による区分である。すなわち京都唐本屋八郎兵衛と同じく京都の茨城多左衛門の二系統をいう。今私の調査した図書館、文庫等の所蔵本は次の通りである。

○唐本屋八郎兵衛門本

1東北大学図書館(狩野文庫)、一本。十七巻十七冊
2国立公文書館(内閣文庫)、一本。十七巻十七冊
3国立国会図書館　一本。十七巻十七冊
4東京大学図書館　二本。ともに十七巻十七冊
5早稲田大学図書館　一本。十七巻十七冊
6岡山大学図書館(池田文庫)　一本。十七巻十七冊
7金沢大学図書館　一本。十七巻十七冊
8京都府立資料館　一本。十七巻十七冊

○茨木多左衛門本

1早稲田大学図書館　二本。一本は十七巻十七冊。他の一本は巻一、六、七巻はそれぞれ独立して各一冊。巻二と三、四と五、八と九、十と十一、十二と十三、十四と十五、十六と十七巻はそれぞれ合冊となっている。十七巻十冊。
2学習院大学図書館　一本。
一巻より七巻まで合冊。七巻より十七巻まで合冊。
3阪急池田文庫　一本。巻一より七巻まで巻一から七巻まで各一冊。巻八と九、十と十一、十二と十三、十四と十五、十六と十七巻とでそれぞれ合冊、十七巻十二冊となっている。
4大阪府立中之島図書館　一本。巻十一と十二巻は合冊。それ以外は一冊ずつ。十七巻十六冊。

唐本屋の系統の本は各巻が独立しているのに対し、茨城多左衛門本は合冊の仕立てが目立つ。そのような体裁上の異同は別として、二種の系統本は校合の結果、内容的に異同はなく、また各巻の丁数、本文の行数

も同じである。さらに頭注、内題等の有無も異同は見られなかった。ただ二系統のうち、唐本屋八郎兵衛本の方が摩滅欠損部分はほとんどなく、茨木多左衛本の方が摩滅欠損がとこどころに見られ、この二系統の本を比較した場合、さきの『日本文学大辞典』で中村幸彦氏が述でおられるように唐本屋八郎兵衛本が初刷り本であり、茨城多左衛門本はやはり後刷り本と認めるべきであろう。以上で簡略な書誌的考察を終えるが、さきにも述べたように、まだまだ未見の書があるので後日を期したい。『国書総目録』には「旧海兵」として写本が示されていたが、江田島の教育参考館に問合わせたところ、現存しないということであった。戦後の荒廃とともに米軍の検閲を配慮して焼却に処したのもかなりあったようだ。しかし、まだ日の目を見ないでどこかに埋もれているかも知れない。夢のよう話だが……。

注

① この序文は享保元年（一七一六）十一月一日に書かれたものである。刊行はその一年後である。この書の成立の時期を示したものであろう。

② 水戸の徳川水圀の修史事業として編纂された「大日本史」の一環として世に出た『参考源平盛衰記』には、『台記』『山穂記』『玉葉』等の日記類が参考に供されており、筆録者たちには秘録という意識はうかがえない。

③ たとえば嘉応元年（一一六九）五月十六日の記事に京都の清水の瀧が枯れたことが語られているが、『百錬抄』によって徴してみると、やはり同年同月の条に同じことが記されている。

④ この文章は章段名を記した表題と本文の文章との間に、ちょうど割注のような形で記されたものである。

⑤ 「古典大系」の『風土記』の『鎌倉実記』の引用に誤りがある。「大系」は「伊豆猟鞍」以下三箇条をすべて、「実記」巻三からの引用としているが、実際は「温泉」の条のみ巻三であり、他の二箇条は巻四にある。

⑥ 宇田川武久著『瀬戸内水軍』のなかの第一章「守護大名と海賊衆」参照。

⑦ 巻六之下「入道逝去」（大阪府立中之島図書館蔵）

⑧ 『太平記評判』（大阪府立中之島図書館）蔵。

⑨ 私ニ曰……然ルニ此一事ハ歴々タル実録ニ相異セリ。惣テ太平記ノ評判ヲハシメ本書ノ事実ノ真偽ヲ吟味セズヨキホドニ説ヲコシラヘ伝ニ曰ク卜記ス。信用スベカラス。（巻五、「治承四年九月従リ寿永二年五月ニ至ルノ雑記」）

⑩ たとえば宝暦五年（一七五五）六月の漢文自序のある、新井白蛾の『牛馬問』には、「水尾谷教経」の項として、次のような筆記がある。

（前略）又曰、一谷落城の時、平家公達大方討れ、或は生捕る。此時門脇大納言教盛卿の息男能登守教経、兵庫より二十町ばかり坤の方、駒林といふ処まで落給ふに、安田遠江守義定、只一騎にて追かけ名乗けるは、清和天皇七代の後胤新羅三郎義光が孫、逸見冠者清光が三男、安田遠江守義定なりと呼はりければ、教経も馬引かへし、例の大弓彎キしぼり、きって放、あやまたず義定が甲にあたり馬より落つ。教経も馬より下、義定に乗かゝり首を取んとせし処へ、義定が甥に一条次郎忠頼といふもの馳来り、後より組かへし、終に教経を討取ける。平家の軍中伝へ聞もの、茫然として闇夜に燈を失ふがごとし。時に能州、指次の弟有。是は幼年唖にて有し故、父教盛ゆくゆくは出家にもなしくれよとて、紀太郎に預置れしに、此児十歳を過て、ものいふ事を得て常人に同じ、因て紀太郎、己が子とし、紀小次郎景望といひしを、宗盛、惟盛等密談の上尋ね出し、即座に能登守教経とぞ呼はりける。此人、力量面体音声までも生移しの能州なれ、誠の教経討死の事は偽りとなり、世上その沙汰なし。此明年、惣門の浜合戦に、佐藤継信を射たりしは、此教経にてぞ有ける。又此時紀九郎、継信が首をとらんと走よるを、忠信、是を射倒す。此紀九郎は紀七、紀八が弟にて、紀太郎が甥なり。紀九郎を聞あやまり菊王と伝へ菊王という名は、童子ならんと推量し、能登殿の童菊王丸と書つたへるとなり。此説一談といふべし。

（本学非常勤講師）